

週刊朝日の記者時代の先輩から「きれいな本ができたから」と、表紙から満開の桜がこぼれ落ちそうな一冊が送られてきた。

「皇后美智子さまのうた」。画家の安野光雅さんが、ご成婚55年を迎える天皇・皇后両陛下の歌から133首を選び、皇居を彩る植物のスケッチと解説をそえている。

先輩は山本朋史さんという。安野さんが体調を崩し通院していたときも人知れず同行し、長く信頼関係をつくってきた。だが1年前に本人が軽度認知障害と診断され、早期治療体験ルポに挑んでいる。

そんなコンビが週刊朝日で始めた静かな連載が「美智子さまのうた」になった。

私、皇室に興味がある方ではない。歌の素養もゼロ。だが帰りの電車で本を開くとたちまち引き込まれ、2駅乗り過ぎた。

ショックだったのは、この歌だ。

「知らずしてわれも撃ちしや春蘭（た）くるバーミアンの野にみ仏在（ま）さず」（平成13年）

タリバーンが破壊した石仏を悲しまれたのだろう。驚いたのは「知らずしてわれも撃ちしや」という言葉である。言うまでもなく、我が国の皇室とイスラム原理主義者の行動に関係があるはずもない。それを、もしや自分の問題であるかもしれないという人とは、いったいどのような方なのか。

\*

読みすすめると、両陛下は55年間、苦難に立たされた人々の元へ通い、また通い、折に触れ思いをはせ、繰り返し歌に詠み続けてこられたことがわかってくる。

ハンセン病療養所。阪神、東日本の震災はもとより全国の被災地。硫黄島、サイパン島など多くの悲劇を刻んだ激戦地。そして毎年巡り来る沖縄慰霊の日には、世界のどこにいても方向を確かめ、黙祷（もくとう）をささげるといふ。それはおおよそきらびやかな皇室のイメージとはかけ離れ、何か強い意地のようなもので感じさせる。

「そこまでしなくても、と思うこともあるのですが」と安野さん。

終戦直後の出来事が記されている。

GHQ最高司令官マッカーサーは昭和天皇と最初に面会したとき、天皇を戦犯に問うのはよくないと考えていた。だが天皇はそれを知らず、自分は全ての決定と行動に全責任を負うと言った。「私自身をあなたの代表する諸国の裁決にゆだねる」

これはマッカーサーの手記で、日本側の正式な記録はない。さきの戦争で亡くなった日本人は戦闘員、非戦闘員合わせて310万人。天皇の戦争責任については様々な意見がある。

だが天皇のため命を捧げることが名誉だと信じた無数の国民の死が、天皇家に深く刻まれなかったはずがあるろうか。罪に問われなかったからこそ、痛恨の思いは強く受け継がれたのではなからうか。

圧倒的な犠牲を胸に、息子夫婦は修行のように全国を歩き続ける。

「初夏（はつなつ）の光の中に苗木植うるこの子どもらに戦（いくさ）あらすな」（平成7年、植樹祭）

反戦、と言葉で言うのはたやすい。だが長い平和のときにあつて「戦あらすな」という祈りを胸の奥に抱えて暮らすことは、たやすいことではないとおもう。

\*

10月、傘寿の誕生日に美智子さまが発表した所感が話題になっている。

戦後70年を迎えるにあたってのお気持ちを問われ、ラジオでA級戦犯への判決の言い渡しを聞いた時の恐怖を忘れられないと記した。「国と国民という、個人を越えた所のものに責任を負う立場があるということに対する、身の震うような怖（おそ）れであったのだと思います」

あの敗戦とは何だったのか。あちこちで噴き出す強い言葉の応酬。私たちは、今もそのことを消化できずにいる。

東京裁判は戦勝国による一方的な断罪だという批判がある。その通りに違いない。何しろ日本は負けたのだ。だがもし他者による断罪がなかったら、どうだったろう。

あれほどの犠牲と悲劇を前に、だれがどう責任を取るべきだったのだろう。

19歳で一兵卒として終戦を迎えた安野さんは、二つの投げかけをしている。

戦争のとき、前線はむろん命がけだったが、銃後も同じだった。空襲というものがあつたから、国に命を捧げたのは兵隊さんばかりではなく、日本人全員だった。

沖縄が戦っているとき「本土決戦」というスローガンがあつた。だれも表立って、ここらで白旗を掲げようと言い出すものはなかつた。沖縄は数知れぬ大きな犠牲をはらい「全滅」した。そんなになるまで戦いを続けさせたのはだれか――。

私は戦争を知らず、一冊の本だけで全てを語れるはずもない。それを承知で考えている。いったいだれが悪かつたのか。

昔の話に限らない。戦争のない世の中にあつても、私たちのまわりは悲劇や不平等や理不尽にまみれ、だれかがその犠牲になっている。悪いのは、だれなのか。

もしかしたら、私の問題ではないのか。

そう考えることからしか本当の意味で歴史に学ぶことはできないのかもしれない。バーミヤンの石仏を撃ったのは私かもしれぬと、私は思うことができるだろうか。